

江東未来会議
第1分科会（子育て・教育分野）
第4回 議事概要

日時：平成19年11月28日（水）19:00～21:15

場所：文化センター2階 旧区政PRコーナー

参加人数：16人

1. 開会

2. 事務局からの連絡事項

- ・配布資料の確認

3. 本日のワークショップの進め方について

（1）前回の振り返り

○高重コーディネーター

- ・前回は、現状の問題点や課題についてご議論いただいた。それらを取りまとめたものが本日配布した統合版である。前回、ご検討いただいたものを分類したものであり、一番上段は第2回の未来会議において、ご提案いただいた将来像のまとめを再掲したものである。
- ・問題・現状を認識して、解決の方向性、どんなことをしていったらよいのかという課題をだしていただいた。本日は、統合版を拡大したものがあるので、ここに不足している視点など付箋に書いて貼りこんでいただき、さらに、将来像についてグループとしての意見を取りまとめてほしい。
- ・統合版は、子育て、教育各々についてと、地域社会の中での連携によって教育や子育てをしていくことうという視点でのとりまとめと、子どもの居場所について取りまとめたものとなっている。
- ・本日は、ご自身の関心分野によって議論をしていただく。分野は、子育て、教育、子どもの居場所を含めて地域社会についての3つに分けたらどうかと考えている。もちろん重なる部分もあるので、どこに重点をおくのかということで分野を決めてほしい。
- ・まず、この3つの分野でよいか。

○参加者

- ・よいのではないか

【3グループに移動】

（2）本日の進め方について

○高重コーディネーター

- ・それではこの3つに分けてご議論いただることとする。また、グループは固定ではなく、次回以降に他の分野に移ることもよいこととする。

- ・各グループで、話を進行する人と、議論のメモをとっていただく人を決めてグループ討議をしていただきたい。
- ・本日は将来像を文章化することを念頭にご議論いただきたい。今、記載の将来像は、将来像より若干具体的なイメージとなっているので、10年後を見据えた大きなイメージで将来像を描いてほしい。

4. ワークショップ

(1) 作業

前回議論を整理した、「問題・現状の認識」、「解決の方向性」、「何をすべきか」各々を精査するとともに、子育て・教育分野の将来像について討議した。

【グループ毎に作業】

(2) 発表

【作業結果】詳細は別紙「第4回江東未来会議 子育て・教育分野」参照

○Aグループ（子育てについて）

- ・保育園や学童保育施設が不足しており、充実が必要であるとの意見があった。
- ・子育てが楽しくなるようなシステムが必要であり、保健所の助産師などが父親や母親の心によりそなうような訪問をすること、鬱などに対する育児支援など、産前産後の訪問型子育て支援によるケアが必要との意見があった。
- ・子育てに地域が関わる仕組みをつくることという意見が挙げられた。
- ・子どものことについて、例えば保育園についての窓口や育児関係のことは他の窓口となっているが、子どものことが全て一つの窓口で解決できるよう組織も一つにすることが大切ではないかという意見があった。
- ・年代を超えた交流については、子ども達とお年寄りなどが日常的な交流ができるような施設が必要であると考えた。
- ・様々な施設の運営については、区民参加の運営協議会を設置すること、という意見が挙げられた。
- ・今ある子育て関係施設のさらなる充実、また、児童館の充実やプレイパークの設置という意見もあった。
- ・将来像としては、子どもが楽しくのびのび成長でき、親も孤立しないで、楽しく子育てができ、地域も子育てに関わるのが望ましいという意見になった。

○高重コーディネーター

- ・今の発表に対して質問や意見があつたら出してほしい。

○参加者

- ・子育てのNPOが江東区内にもあると思うがどのくらいあるのか。

○Aグループ参加者

- ・NPOもあるが、ボランティア団体として活動している人達がたくさんいて、それらについて

ては行政として把握できていないのではないかと思う。小さなボランティア団体ができるだけ消えていく。ただし一時的でいけないということではなく、必要な時に作られ、有効に機能している。行政が音頭をとって協議会のようなものを作って育ててほしいと考えている。

○参加者

- ・ボランティア情報などは、子育て家庭が見られるよう冊子などになっていることが必要だと思う。

○参加者

- ・支援センターの充実という点については新たに整備するということか。

○Aグループ参加者

- ・現在支援センターは5箇所設置されている。いずれも数十人が入れる程度の施設で近隣の人は毎日通うことができるが、中にはバスなどで行く親子もいるようだ。

○参加者

- ・施設が足りないということか。

○Aグループ参加者

- ・児童館や文化センター、町内会館などを開放して、小さなものを各地に設置し、地域で育てていくということを含めて充実と考えている。

○Bグループ（子育て・教育に関する地域のあり方について）

- ・農園の活用という意見が最初にあった。第三大島小学校跡地を使って農園を作るという意見である。現在、区の農園が2箇所設置されているが、倍率が9倍と高く簡単に利用できない。その一方で、農地を借りても作物を作れない人もいるので、それら十分に利用されていない農園をつかって交流をはかったり、またその周辺にプレイパークを整備していくという意見が挙げられた。

- ・次が、地域のコミュニティ拠点としての集会場についてであるが、使い方を知らない人が多いので、使い方の明確化、周知することが必要という意見があった。

- ・交流場所について、場所はあってもそういう場所を知らない人が多いと思われることから、交流場所があることを知つてもらう、入り口が必要という意見があった。

- ・地域企業の協力を得て、子どもの職業体験をさせれば子どもの視野が広がったり、コミュニケーションの能力も向上するのではないかと考えた。

- ・区民農園や企業を活用して、働く体験や農業を体験し、そのことに対する対価を得ることで楽しみをつくるということも良いのではないかとの意見があった。

- ・これらを踏まえて、将来像としては、地域社会を通して世代を超えて分け隔てなく交流していくことが、平成30年に向けて必要だ、という意見となった。

○高重コーディネーター

- ・今の発表に対して質問や意見があつたらどうぞ。

○参加者

- ・地域のあり方として一つ検討していただきたいことがある。道というと自動車道路である

がこれを人の道にしていくことで、住宅環境もよくなるであろうし、商店街も変わり、町が変わるのでないかと考えている。行政がやることだけでなく、働きかけていくことが必要だと思う。それらが整備されていけば住宅環境が良くなっていくのではないかと思う。いずれにしても自動車道路と人の道路を区分けしていくことが必要ではないか。

○Cグループ（教育について）

- ・将来像として3項目に集約した。1つ目は、学校と地域・親をつなぐシステムづくり、2つ目は、学校教育の充実、3つ目は、子どもが体験する機会の充実（シルバー人材センターの活用）である。
- ・学校と地域・親をつなぐシステムについては、親のニーズが多様化している中で、親と学校を結ぶコーディネーターとしての人材を提供することが必要ではないかという意見である。
- ・学校教育については、公教育で十分という学校教育であるべきということである。塾がいらないような公教育にしていくことが必要であり、そのために親は親としての責任を果たすことが必要という意見があった。また情操教育や人間性を養うためには子どもの体験機会の充実を図ることが必要と考えた。

○高重コーディネーター

- ・今の発表に対して質問や意見があつたらどうぞ。

○参加者

- ・コーディネーターについて十分理解できなかつたので説明してほしい。

○Cグループ参加者

- ・学校への要望が多すぎて、本来の教育ができなくなっている。フィンランドの事例では、心理士や学校教育サポートチームなど先生の教育をサポートするとともに親のサポートもしており、こうした仕組みが必要だと思う。
- ・国の事情等は異なるが、今日の議論だけでは不足だった点もあると思われる所以、このような取り組みを入れたらどうかということを提案していただきたいと思う。

○Cグループ参加者

- ・地域の中にはいろいろな知識を持った人がいるが学校はこうした人材を生かしていないのではないか。こうした地域知を学校教育に生かすために、コーディネーターが必要と考える。

○Cグループ参加者

- ・シルバー人材センターには、墨絵の指導ができる人はいないなどの要望が来るが、こうした色々な人材を学校教育に積極的に生かしていくためにはコーディネーターが必要ではないかと考えた。

5. 次回の進め方について

○高重コーディネーター

- ・次回は本日の議論を踏まえて、具体的な事業アイデアを検討し、それらについて、区民が

できること、行政にやってもらいたいことなどの役割分担について検討していく。

6. スケジュールについて

<次回以降のスケジュール>

- ・第6回 1月31日（木）19:00～21:00 （場所）江東区役所庁舎7階第72会議室
- ・第7回 2月21日（木）もしくは2月22日（金）（時間はいずれも19:00～21:00）

持来像

- 子どもが楽しく、のびのび成長でき、親も孤立しないで楽しく子育てができる、地域全体で子育てをするシステムがある江東区
- 孤立した子育てのない楽しく子育てができる地域社会を行政主導でつくる

- 社会性や協調性、他者への思いやりの心のある伸び伸び・元気な子ども達
- 親としての自覚をもち、社会を生きる人として子を導く家庭教育
- 家族が互いを尊重し、協力しあえる安心・やすらぎ・笑顔のある家庭
- 不安・悩み・つらさをうち明け、分かち合い、癒される仕組みをもつ社会

問題・現状の認識

子育てに関する親の意識の低さ、家庭の子育て力の問題がある

- 親の認識不足の改善
育児教育は親の責任
- 家庭の機能不全
一家庭支援
- 給食費を払わない→社会規範が崩壊
- 家庭の子育て力の低下
←社会の変化
- 子ども達は何を期待しているか。子ども達のことをもっとよく知るために何をしたらよいか
- 親が核家族化等で子育てを学ぶ機会がない
- 7歳までに座って話を聞くしつけができない
- 両親で働くとどうしてもおろそかになる子育て環境

保育園、学童保育とも施設が不足している

- 日本一の保育園待機児童数→認可保育園の大幅増設、区立の保育園新設
→「認証」「認定子ども園」は保育の質の低下を招く
- 見積もりの余裕
現在の待機児童は参考にならない
- 100人を超す過密、過大な学童保育→適切な定員での学童保育増設
→放課後子どもクラブではなく学童保育
- 幼稚園の入所困難
→区立にも3年保育を作る。選択肢の拡大
- 子ども、親を混乱に陥れている保育園民営化
→実際の検証を十分にやり、子ども達のためにになっていないのであれば再検討する
- 保育園などの数が少ないので数の増加

解決の方向性

家庭が子育ての力をつけていくための家族のあり方を見直す

- 家庭が子どもの居場所として良いものであるために、親の働き方や社会の労働の仕方などにもっとゆとりがないといけない。少なくとも子どもの話が聞ける家庭になるように

子育てを学ぶ機会を設ける

- 土日開庁
家計維持者（働いている人の）育児・教育への参加

- 子育てを学ぶ支援の機会の増加

地域が子育てに関わるしくみをつくる

- 地域社会が子育て、教育にどう関わっていくか、システム・組織づくりが必要
- 地域が子育てに関わるしくみをつくるシステム・組織づくりが必要

地域の実態に合わせて、保育施設の量を確保し、質を高める

- （質が整った）
保育施設の充実
- 重点形成（地域）
南北地域の事情に合わせた配置

- 子育て支援
・保健所⇒訪問指導含め
・子育て支援センター（みづべ）の充実
(質・量共に)

何をすべきか

労働時間や休暇制度等子育てしやすい社会システムをつくる

- 子育てがしやすい社会環境づくり
→労働時間、休暇制度等で子育てしやすい社会システム
- 「8時に家族そろって夕食」はみんなしたいけど、したいと思うだけではできない

子育ての仲間づくりができる機会や場所をつくり、仲間づくりを促すヒントを配置する

- 親の支援や仲間づくりの支援→幼児を持つ親の学級の拡大。幼児を持つ親同士が気軽に遊びに行けて仲間作りができる場所づくり
- みづべなど、誰でも参加できるようにする→みづべの職員などによる仲間づくりの促進

- 子育てる親を孤立させず母親や父親の心にそったケアやサポート体制の充実（親の仲間作りやいつでも相談、休息できるケアやサポートをし、親が楽しく子育てできる）

子育て相談窓口や家庭訪問型子育て支援など子育て支援の体制をつくるとともに、指導員を育て、保護者を教育する

- お年寄りと子育て親子との交流の場をつくる
・お年寄りの居場所
・子育ての知恵をもらう

- 産前産後の訪問型子育て支援
子育て不安の解消
心のケア、母親の心に添った子育て支援者の養成を実施

- 地域総合センターの建設
子育て中、子ども、青少年、お年寄りの方々が一緒に交じって交流できる場（施設の有効利用）

- 親（育児中）の相談窓口の不足→みづべ（子ども支援センター）などで気軽に安心して子どもと離れて親の悩みを相談できるようにする

- 指導員の研修
保護者の教育

- 助産師、保健師がもっとやさしく、心にそうような訪問をしてください。

- マタニティブルー、産後のウツ
⇒育児支援者、ボランティア訪問

- 家庭訪問型子育て支援。子育てスタートの躊躇はささいな事でも大きくなる要因となる。早期の支援は地域ボランティアで支援しよう

- 育児する親（特に母親）の負担が大きい→負担軽減（新生児訪問の第2子以降の実施
育児学級や母親教室など保健所のサポート拡大）

- 子育て、育児支援の相談窓口の設置

- 子育て
育児負担を軽減させるための対応
育児相談充実
保育施設の充実

既存施設のサービス拡大による保育機能の充実や保育施設の整備を進めるとともに、保育の質を担保する区民参加の仕組みをつくる

- 親の就業に関わりなく保育園の利用をもっと自由に安価にする

- 区民参加の施設運営システム⇒様々な施設ごとの区民参加、運営協議会の設置

- 共働き家庭の支援
・認可保育園
・学童クラブ

- 必要数の整備
↓
区立直営も

- 児童館の機能充実（赤ちゃんから高校生まで）
プレイパーク設置

- 家庭で保育する親への支援が不足→保健所の一時預かりの安価での利用や男女共同参画センター、さくらんぼ保育園のような施設の充実

- 保育園での保育
→「保育の質」を担保、向上させるための区民参加でのシステムを作る（文京区などの区民参加会議）子育て世代でも無理なく参加

- 保育所の不足
→保育所を増やす。子ども園の充実（就業しているかどうかに関わらずみな必要と思う人が利用可能になる）

教育－「教育体制」「体験学習」

将来像

■塾に頼らない教育の推進

- 子どもの学力を着実に伸ばす教育体制が確立されたまち
- めまぐるしく変わる社会の波を生き抜く、知力・体力・創造力を育む教育が充実したまち
- 地域の産業、技能など地域の教育力を活かした特色ある学校教育を実現したまち

- 社会的弱者を阻害しない平等な教育を実践するまち
- 子どものもつ能力を最大限に伸ばす早期教育の仕組みがあるまち
- 学校開放や廃校利用などにより子どもも大人も学べる教育施設が充実したまち

問題・現状の認識

親の教育に対する意識格差や経済格差が子どもへの教育に影響を与える

親の経済力による平等な教育の実践の阻害はこれからの10年間で表に現れてくるので公的な補助が必要

教育に熱心な親と疊間子どもをあざかってくれるだけでも助かるという親との温度差は大きすぎる

所得格差が教育格差につながっている

区内の学校同士が交流し、情報交換する場がない

教育に関して区内の地域によって違いを感じる。統一する必要はないが、意見交換などの場がない→交流の場

教師の権威低下、知識教育の偏重、体験学習不足など学校教育が弱体化している

目的意識のない学校教育

知識教育の偏重

先生が尊敬されない→大人(親)がしていない、子どもも真似をする

子育ての体験不足
→授業に取り入れる

体験学習の不足

学校、学びの貧弱化
スウェーデン等ヨーロッパの義務教育制度は日本どこが違うか学びたい

土曜日の学校開校に伴う教師確保は財政面での負荷が大きい

世の中の流れは週休2日制になっているので、土曜日、休日の学校での教育のためにには教師の増加は避けられない。区の税金でまかなえるか

解決の方向性

家庭の責任、学校の役割を明確化する

学校的役割が不明確
⇒しつけの責任
⇒塾の必要性

幼稚園と保育園の格差をなくす

幼稚園と保育園の格差をなくす
(どちらが良いか)

基礎的学力を持つとともに、子どもの個性に合わせ、創造性を発揮して自主的な学習ができる公教育の充実を図る

個性に合わせた教育
幅広い基準で伸び伸びと教育
学校教育
教える教育主体から自分でテーマを決めて学び、互いに議論できるような教育が望ましいと思う

子どものときから忙しい。ストレス多い子ども。
→子ども自ら学びたい気持ちでそった教育づくり

競争教育でなく、個性を大切にしつつ、基礎的な力を身につけられるようにする。ために経済的格差を行政でフォローできるように

体験教育や地域の歴史・文化を学ぶことなどを通じて豊かな心を育む

子どもの体験教育
(ボランティア体験)
家庭の子育てで豊かな心の育成、歴史と文化を知ることで人を育てる

しつけ・道徳教育のための家庭や教育機関の連携を図る

道徳、規、家庭と保育、学校との連携
親がしつけに責任をもつて地域のサポート

何をすべきか

幼稚園での生活習慣の体得、学校における学力習得のための教育体制を整える

幼稚園を3年間に生活習慣を身につける補助
選択肢のたくさんある教育カリキュラム
語学・体育・珠算

学校での授業が充実するために協力しあい(助け合って)学べる学級(人数を30人以下にする。様々な能力の子どもが一緒にいる)にする

豊かに学べる学校
→少人数学級の充実
→小さい学校を廃校にせず大事にする

学校・地域・家庭の連携により、学習内容の充実と教育体制の確立を図る

学校や親のニーズを取り上げコーディネートする人材を提供していくシステム

学校と地域・親をつなぐシステムづくりをめざす

「図書館と学校との連携」
子ども達が読書を楽しめるように

フィンランドの教育の例のように「生徒サポートチーム」-保健師、学校カウンセラー、学校心理士からなるチームで学校と保護者が対立するのを防ぐ機能を果たす

大人・外国人など全ての区民に学ぶ機会を提供する

「外国人のための日本語教室の支援」
文化センターが窓口の講座を支援。安い授業料・教材費

「夜間中学校をつくる」
もう一度学び直すチャンスをつくる
外国人の日本語教育のため

公教育だけに十分なレベルに向上
←塾がいらない
学校・親の責任

農山漁村自然体験の機会をつくる

地方で触れあえる環境を体験する機会をつくる⇒砂浜や森・山

小学生が農山漁村に長期滞在して体験活動を行えるよう国が補助金を出すのだから大いに体験学習をすべきである。受け入れ先は一般家庭が望ましいので県市町村にあたり協力を。。。

農山漁村自然体験の機会をつくる⇒他県と姉妹都市協定を結ぶ

子どもの体験する機会の提供充実をめざす←シルバー人材センターの活用等

多様な体験学習、情操教育、コンピューター学習などを取り入れる

幼稚園から絵本、本に 관심を持ち情操を向上させる

小中学生にもっと音楽や美術など豊かな心の育成、歴史と文化を知ることで人を育てる

子どもの多種多様な体験の不足→子どもに農業体験をさせたり、親の働く姿を見せる機会をつくる

「コミュニケーションができる子どもを育てる」
ライオンズクラブの導入(思春期のライフスキル教育)

「学校と地域とのコーディネートシステムづくり」
学校は地域を必要としている

教育・職を立て直すために親教育を進める

学校の地域対策(不良対策)我が子可愛さからか全く無理解な親、苦情ばかりで学校を悩ます親指導(対策)をする専任を持たない

特別支援学級の区設置などによる特別支援教育の充実を図る

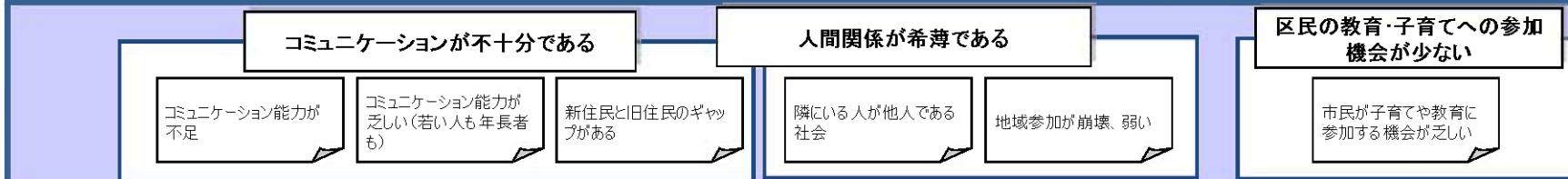
増加する特別に支援を必要とする子どもへの教育
→特別支援学校の新設(臨海部)
→特別支援学級の新設

子育て・教育の基盤としての地域社会

持
來
像

- 家庭・学校・地域が支え合い・協力しあう子育て社会
- やさしさや互いを愛しむ心のあるゆとりある社会
- 自然・生物への畏敬の念を育み、地域の人々とのふれあいがある農業体験の場があるまち

問
題
・
現
状



解
決
の
方
向
性

学校を地域の核に位置づける

- 学校の開放 地域の人々が集まる場所として
- 学校が地域に位置づくために親も子も地域の人たちもその地域や学校を大切にできるようにする(学校選択など地域を軽視するなどダメ)

世代を超えて交流できる場所を地域に設ける

- 地域の活性化 子ども達シルバーの交流(触れ合い)生きがい
- 地域社会を通して世代に問わらず互いに尊重し、分け隔てなく交流できること
- テレビゲーム等家の中の遊びを外に向けて。世代を超えて交流できる場所を

- 親父の会 子どもと親同士の交流の場
- 人が集まる場があればよい参加しやすい方策

- 0歳～2歳位までの子育て親子のコミュニケーションの場を各町会で利用できるようにする

交流を促すしくみをつくる

- 異年齢や異世代の交流の不足 →未就園児、幼稚園児、小中学生の交流や幼児と高齢者の交流の機会を増やす
- 地域の行事をもっと広く参加しやすくする

何をすべきか

子ども・地域の人、親子が参加する農園を、学校周辺や学校跡地などを利用してつくり、農作業体験や交流の場とする

- 道徳教育を座学で教えることも大切だが、農作業を通じて命の大切さを学ぶことの方が喜びがあつてよいと思う

- 各学校の周りを利用すれば野菜作りができるように思えるし、町の中に経験者がいて地域と学校のコミュニケーションになる

- 親子体験学習 土に親しむ、食育を大切に、食料自給率100%は本当に理想だと思う

大人から子どもへ、昔の遊びや文化を教え・伝え・交流を図る

- 具体的には、第三大島小学校が移転した跡地が更地になっているのを利用して区民農園等にして子ども達と一緒に作物を育てていけたらいい

- 地域の交流の場として区民農園を作る。
大島第三小学校跡地

- 地方に区民農園等を作り、そこで働く子ども達に報酬を支払う

学校の空き教室や緑化した校庭、既存施設やコミュニティ道路など交流の場を設け、大人・高齢者が見守り、世代を超えた交流を促す

- 子どもも大人も利用できる学校の空き教室開放が望まれる

- 老人と子育て世代の交流の場 文化センター、廃校の開放で(地域の)交流の場をつくる

- 「教育環境整備として“コミュニティ道路”を作る」 通学道路、散歩道路、スローライフ

- 各地域に交流場所を確保し、年齢を問わない交流センターの開設

- 世の中の変化のスピードがますます速くなるので、コミュニティ道路を利用したまちづくりが人の心をなごませるし、子ども達の情操を育てると思う

- 地域の大人たちとか、(シルバー)ボランティアによる管理
 - ①芝生等給水、手入れ
 - ②子どもの安全
 - ③遊び…指導、教育

- 緑化効果
 - ①環境(ヒートアイランド対策)
 - ②健康(精神安定)

子どもの安全な遊び場・居場所の確保

将来像

- 地域の人のとのふれあい・交流がある安心と安らぎの居場所があるまち
- 地域の大人が一体となって見守る安全な子どもの遊び環境
- 子どもが遊び・ふれあい・元気になる親しみのある水辺と豊かな緑のある公園がたくさんあるまち

問題・現状の
認識

- 子どもが自由・自主的に安心して遊ぶ場所が不足している
- 公園などが有効活用されていない
- 遊びを通じての子ども育ちや可能性を伸ばす場や機会が少ない
- 安全な遊びのための見守りが不足している

- 子どもが自動的に活動する場の不足
- 子どもが安心して遊ぶことができる所がない
- 子どもが安全に外でのびのび遊べない

- バランスの取れた緑の不足
- 公園など多い区だと思うが有効活用されているか。→公園などのイベントやクラス

- 遊びによる育ちの不足
- 10代の子どもや青年が自分の可能性を伸ばす機会がない
児童館→青少年の家

- 放課後の子ども見守り不足

解決の方向性

子どもの安全を守るために子どもを見守る大人の目を増やす工夫をする

- 子どもの安全に対する課題
交通事故、その他(水難事故など)変質者対策

- 子どもの安全を守るために子ども達から子どもらしい時間・空間をうばわないために何をするべきか

- 地域で顔を合わせる環境づくり
安全、安心

- 地域の大人の目がもっと増えること

何をすべきか

子どもが元気に遊べる遊び場や指導員をおいた公園を整備する

- <プレイパーク>
遊び指導員をおいた公園
- 遊び場が不足
→子ども達が元気に遊べる公園やボール遊び、キヤッチャボールなどのできる遊び場の充実、緑や水辺のたくさんある公園づくり

- 交流の場の入り口作り
(区報、インターネットなどで周知)
- 集会場利用の方法の明確化

乳幼児から中高生まで遊び・居場所となる「ひろば」を既存施設を活用しつつ充実させる

- 子育てサロン、子ども(中高生含む)の遊び場としての「ひろば」の充実
→児童館の充実
- 学校・家庭以外の子どもの居場所づくり
目的がなくても集まる場所からスタートするには?

- 中学生、高校生(特に片親の)が夜間過ごせる場として学童保育が終わった部屋、図書館、または一般家庭にお願いしては?

子どもが安心して遊び・暮らせるための環境を整える

- 地域の大人が一体となって見守る安全な子どもの遊び環境
①小中学校の校庭の緑化(芝生等の張りつけ)
- 夜道の改善
暗い夜道が多いので
- 子どもが安心できる場所、相談できる窓口がある。→子どものいじめ問題など

行政

ソフト事業への予算を増やす

- 施設の基準
粗末でも十分な量(質は次)
- 予算のハート(ソフト事業)をもと増やそう
- ソフトの提供
ハード、補助金からの変換
- 地域交流(ソフト)地域資源(ハード)の活用
- 予算配分をハードからソフトへ
(職業体験等へ)

子育て・教育への市民参加の仕組みをつくる

- 子育てサポートや教育サポートなどの市民参加の制度の創設
- NPOや市民団体を増やすための施策(予算配分増)

地域の人をつなぐコーディネーターを育成する

- 交流の背中を押す仕組み
- 地域をつなげるコーディネーターを作る

子どもの可能性を伸ばす

- 子どもが社会の一員として、また世界の人たちと協力して生きていけるよう育てていけたらと思う。当然地域の援助は必要
- 子ども = 日本人の代表として誇りをもて世界の人たちに主張できる(国益について)また、協力ができるような大人になってほしい
- 区内の会社での体験就業